

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第197号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2019年9月21日

ギンザンマシコ



2019. 7. 6 旭岳

撮影者 臼田 正（札幌市中央区）



も く じ

タンチョウは道央へ来るのに、どこを通るか？	札幌市中央区 正富 宏之 ……………	2
江差町鷗島の野鳥の魅力 — 鷗島野鳥観察調査を通じて —		
北海道環境生活部環境局生物多様性保全課主幹 坂村 武 ……………		5
函館鳥通信① 何食わぬ顔でイスカ何を食べ		
バードリサーチ 三上かつら ……………		8
当会本拠地 野幌森林公園にヒグマ出没		
北海道野鳥愛護会探鳥幹事代表 早坂 泰夫 ……………		9
表紙の鳥 ギンザンマシコ 札幌市中央区 白田 正 ……………		9
画像によるタンチョウ個体の同定		
タンチョウリサーチ 代表 正富 欣之 ……………		10
野鳥情報コーナー		
積丹町神威岬でクロジョウビタキ 札幌市豊平区 小谷 浩一 ……………		11
探鳥会ほうこく ……………		12
探鳥会あんない ……………		16
鳥 民 だ よ り ……………		16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

タンチョウは道央へ来るのに、どこを通るか？

札幌市中央区 正 富 宏 之

都道府県の特徴を示す一つに、県の鳥や都の鳥が決められている。ちなみに「東京都の鳥」は「ミヤコドリ」ことユリカモメで、茨城・熊本両県はヒバリ、山形・鳥取・長崎各県はオシドリと同種が重なっている。が、もちろん北海道はタンチョウで、ほかの都府県では考えられない鳥だ。

“北海道の鳥”が決められたのは、東京オリンピックを翌月に控えた昭和39年9月1日で、私が釧路市立郷土博物館長の辞令をもらい、釧路で独身生活を始め、タンチョウと縁を持つはめになった、まさに思い出深き日でもある。

当時、タンチョウは釧路管内を中心に、根室・十勝両管内に夏のあいだパラパラと分布し、総数は200羽ほど。だから、“北海道の”と言っても、道東以外の人には縁のない鳥だった。仮に、開拓使廃止後に一時設置された函館・札幌・根室の3県の区域割に従えば、“根室県の鳥”はタンチョウになったかもしれないが、“函館県”や“札幌県”は別の鳥になったに違いない。

それはともかく、1950年代からの餌付けにより、今やタンチョウは総数1,800羽ほどになり、まだいくらか増えそうな気配だ。これに対し、暮らしの場の湿地は、日本の食糧基地とカ列島改造の掛け声、それに1997年までの右肩上がりの人口増加による宅地開発などで、急激に失われた。近年でも、1990年代半ばに326km²ほどあった釧路管内の湿原面積も、20年後の2010年代半ばは16km²ほど減って310km²になった。特に減少割合の高かったのは十勝管内で、同じ

20年間でみると4分の1近くが消滅した。

つまり、量は増えたのに、容れ物は逆に小さくなった。しかも、1升ますに1升の酒しか入らないから、溢れたのは受け皿があればそこへ溜るけど、なければ結局1升の酒しか残らない。

これを、北海道のタンチョウの状況でみてみよう。1950年代に羽数が増え始めたころ、道東（十勝・釧路・根室の各管内）には、まだ十分な繁殖環境があった。しかし、数が増えるにつれ、おおざっぱに言って1980年代に根室が、次いで1990年代に十勝の混み具合がひどくなった。大湿原を抱えた釧路も、1990年代は隣の巣まで平均2,700mほど離れていたのに、20年後の2010年代は1,600mと1km以上も狭まり、苦しい状態になってきた。

このため、新たに家（繁殖なわばり）を持ってない若い連中は、20世紀終盤から今世紀初めにかけ、新天地を求めて道東を飛び出し始めた。まず、釧路川沿いに北へ向かった連中は、オホーツク管内へ行ったものの、十分な住み場所を見いだせず、海岸沿いをさらに北上し、今世紀初めに宗谷管内へたどり着いた。

幸い、そこに十勝管内の5倍近い湿原が残っていた。しかも最初の開拓者（パイオニア）といえる番いは、これまで幸いにも子宝に恵まれ、成長した子供たちが越冬地で知りあった仲間を連れて故郷へ戻り、近年急激に羽数が増えている。

では、道東から東へ行くのはどうか。もちろん、根室海峡などはひと飛びで北方四島へ分布を広げ、ここもすでにかなり混んでいる。

それなら、南へ向かった連中はどうか。十勝管内を南下して、数年前には襟裳岬近くまで到達したが、その先は太平洋なので、さらに南へ行く目途が立たなかった。だから、岬を回り込み、日高の海岸沿いに西への道を選ぶしかなかった（だろう）。

それでは、内陸に居て西を目指した連中はどうか。十勝の平野部なら、繁殖環境さえあれば西へも進める。しかし、行く手には最高で2,053mある日高山脈が、壁となって立ちはだかる。しかも、この山脈に連なり北へ大雪山系や北見山系が伸びているから、それを越しての移動は大ごとだ。

ここで問題にしておくべき点がある。

それは、タンチョウはどれほどの高さで飛ぶか、である。低い方は1mくらいだが、残念ながら高い方は確実な記録がない。ツルの中にはヒマラヤ山脈を超えて渡るものいるが、タンチョウはそんな高さを飛ばない（だろう）。現実には、釧路と網走を毎年繁殖のため往復するタンチョウがいて、恐らく春は釧路川沿いに北上し、1ヶ所だけ300mを少し超す高さを飛びさえすれば、後は沢沿いに、さほど遠回りせずにオホーツクの海岸へ着くだろう。札幌近郊では三角山が311mだから、その上を飛ばせばよいというわけ。また、釧路の越冬地でも、春先に200m以上も青空高く上がり、丘陵を越えて繁殖地に向かうのをよく見かける。

さて、道北でタンチョウが増えたら、宗谷海峡をひと飛びして樺太に行くのも現れるはずだ。しかし、海を渡りたくない連中は、日本海岸沿いに留萌まで南下して、後は国道233号線沿いでも飛ばせば高い山など越えずに済むし、天塩川沿いに南下し、塩狩峠あたりがすこし標高は高いものの、急な山など越えなくても旭川圏に到達できる。あとは石狩川沿いに、札幌圏まで難所はない。私はこれを「北（回り）ルート」と呼んでおく。

他方、襟裳岬を回って西へ向かうルートは、海岸沿いだから高く飛ぶ必要はないし、たくさんある川の下流に餌場や休み場もあるので、道中も困らない。現在、むかわ町近辺でタンチョウがすでに繁殖しているが、この連中はこうして移動して来たのだろう。そこで生まれた若鳥が、丘珠の札幌飛行場まで1羽で来

たこともあるから、むかわー札幌間に移動の障壁はないとみてよい。これを「南（回り）ルート」としておこう。

では、この南北のルート以外に、脊梁山脈を超えて西側へくる道はないだろうか。実はこれまで、まれにだが、旭川周辺へ単独のタンチョウが現れた記録が複数あるし、滝川、砂川、美唄などの周辺でも時々目撃されている。これは道北や日高・胆振地方へタンチョウが進出する以前のことから、内陸の旭川近辺まで、大回りの南・北ルートを経てわざわざ来たとは考えにくい。脊梁山脈を超えてくる道があると、私は以前からひそかに想像していた。

今春、この想像をより現実に近い「事件」が伝えられた。北海道新聞の記事によると、5月中旬に南富良野町へタンチョウ2羽が現れ、1羽に脚環がついていたという。そしてこの脚輪付き個体（標識鳥）が、2か月ほど前の3月中旬に、新得町で目撃され、証拠写真もあることを、地元の方へ問い合わせた釧路市動物園の松本文雄さんが確かめた。南富良野町と新得町の目撃地点は、直線距離で約25km、緯度で4分（7.4km）ほどの差だから、ほぼ同じ横（東西）位置にあると言える。

しかし、両者の間には日高山脈・大雪山塊という壁がある。それでも、南か北を大まわりして新得から西隣の南富良野へ行ったとは、考えにくい。タンチョウにとり25kmは、普通に飛ばせば30分の距離だ。高く上がるには旋回上昇

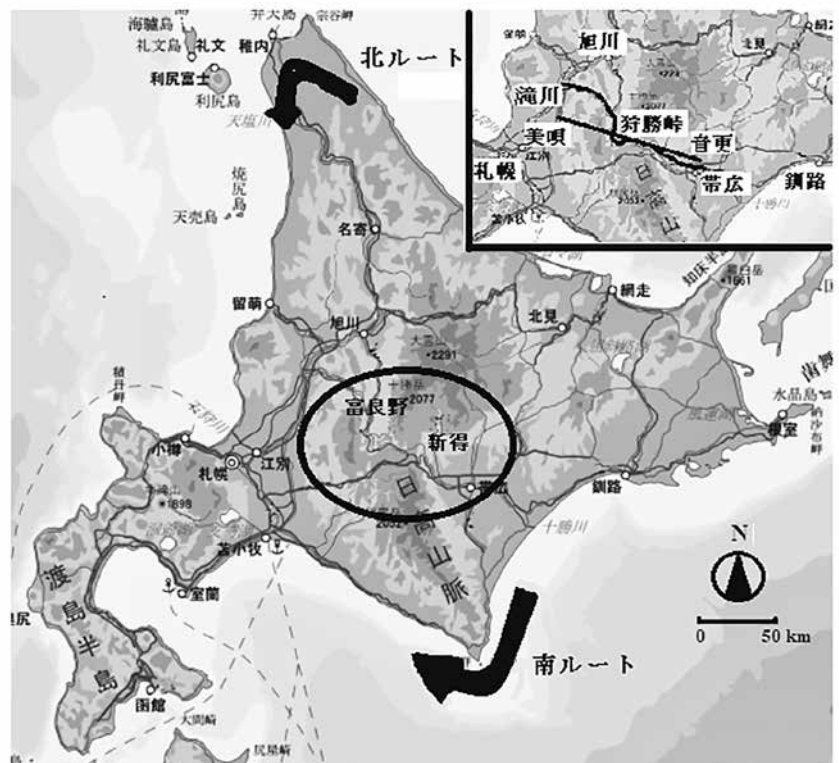


図1.北海道の地形図。灰色の最も濃いところは標高1,000m以上、その周りのやや薄い灰色は標高500-1,000m、その周りの最も薄い灰色が200-500m、これらを囲む灰色が平野部で標高0-200mを示す。丸囲いは「中央ルート」の新得・富良野間。右上図の美唄-音更の直線は図2の横断線位置で、滝川-帯広間の蛇行線は図3の横断線位置。

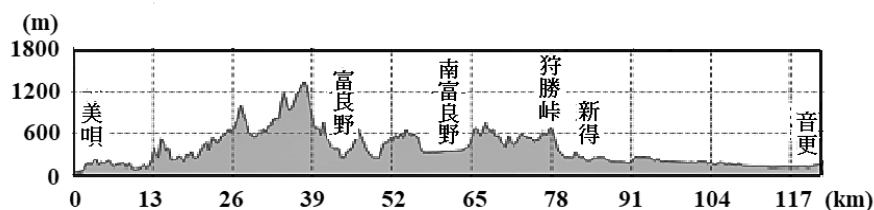


図2.美瑛市から狩勝峠を通り音更町あたりを結ぶ直線をもとにした断面図。

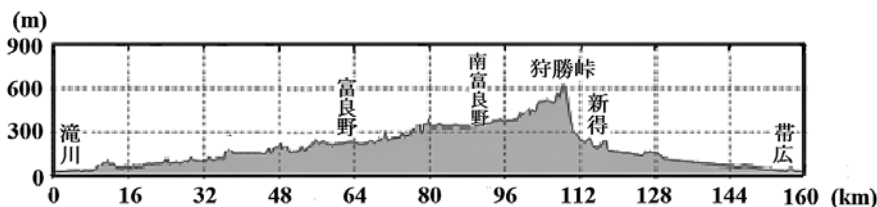


図3.滝川市から空知川沿いに東へ進み、富良野、南富良野を経て狩勝峠を超え、帯広市を過ぎたあたりまでの標高を示す断面図。滝川―狩勝峠間でいえば、直線で結ぶ距離より、空知川沿いの場合は25kmほど長くなる。

飛行が必要なので、少し時間はかかるが、それにしてもわざわざ・・・というわけで、山越えしたのは間違いない(だろう)。

図1の地図を見ていただこう。小さい図でわかりにくい、日高山系と大雪山系とのいわばつなぎ目に、少しだけ薄い色、つまり低いところが横に細く線状にある。ここが狩勝峠で、標高644mである。しかも、海辺の湿地からこの高さを一気に越えるのは大変かもしれないが、新得でツルが居たのは標高220mだから、430mほど上昇すれば峠は越えられる(図2)。札幌の藻岩山より100mほど低いから、うまく気流に乗り“ガンバレ”ば、不可能な高さではない。ついでに言えば、南富良野の目撃点は標高360mである。

この標識鳥は十勝平野生まれの若いメスである。なぜこの鳥が山麓へ来て、峠越えまでしたのか分らない。しかし、近年、繁殖地が混んできた十勝では、平野で営巣できない番いが、適地を探して奥地へと川をさかのぼる傾向が著しい。狩勝峠に近い標高200mほどのところで毎年営巣する番いとか、少し離れた標高約300mで巣を構える番いもある。

仮に、このメスが越冬地で群れ生活していたとき、そうした高地で育ったオスと出会い恋に落ちたでしょう。オスは繁殖年齢(満3歳)になると自分の生まれ故郷へ戻る傾向がある。もし故郷に良い場所がないと、近くに新居を探すことになる。そこでオスが仕方なく峠を越えたとすると、移動やなわばりの選択は一般にオスが主導権を持つから、メスは恋鳥?について行くしかない。

さて、東から西へ行くのに最も効率が良いのは、まっすぐ飛ぶことだ。試しに狩勝峠を通り石狩川まで最も近い直線ルートを設定し、その断面図(図2)をみると、狩勝峠の東西や富良野盆地までの間とか、さらにその西に高い壁があるように見える。しかし、狩勝峠を越してしまえば、空知川を多少曲がりながら沢伝いに後は下るだけで

(図3)、さほど遠回りせず富良野盆地まで行ける。そこでマイホームを作ってもよいし、いくつかの沢筋を選んで北の旭川へ行っても結構。あるいは、盆地から空知川沿いを北西へ抜けると石狩川(滝川市)にぶつかるので、付近で腰を落ち着けても構わないし、石狩平野まで下ってもよい。これが「中央ルート」である。

ただ、旭川の周辺に出現したツルが、すべて中央ルート経由とは断定できない。例えば、胆振地方へ現われた2羽(恐らく南回りの個体)が、次第に北上し美瑛町辺りまで行ったと思われる例もあるからだ(とすると、ウーム! 南富良野の標識鳥もそうだった

か?! ※×?)。

実は、もう一つルートがある。2008年、1羽の幼鳥が石狩市浜益で見つかり、その後各地を回って2010年には富良野盆地へ現れた。当初、道東出身と思っていたが、抜けた羽根を拾い遺伝子解析してみると、なんと中国・ロシアから海を渡ってきた個体だった!! (というわけで、もしタンチョウの羽を拾われた方は、ぜひ私へお知らせ願いたい)。今のところ、事例はこれだけで、その他の道央圏の個体はほとんどが“ドサンコ”である。が、ともあれ、グローバルな視点も込めて、渡来の経路を“謎”の「日本海ルート」と呼んでおこう。

ところで、皆さんは防犯カメラをどう捉えているだろうか。プライバシー保護は大きな課題だが、渋谷の交差点で騒いだこの誰とも分からぬ若者の追跡逮捕とか、脱走犯を遠方まで追いかけて収監に役立てるなど、以前は考えられない機能を持つのも確かだ。そこで、タンチョウがどこを、どのように動くのか、防犯カメラの役を人間が担い、ツルに出くわしたら個人がスマホやカメラで写真に撮り、それを持ち寄って解析するのはいかがだろう。そのさい「防犯」ではそぐわないので、「タンチョウ検出カメラ」、略して「タンカメ」と呼び、なるべく様々なツルの行動と向きを複数写真に残すという方式だ。が、そのためだけに深追いするのは、ぜひご無用に願いたい。

標識付きのタンチョウは多くないから、個体の特定は難しい。それでも、体の色や模様からうまくすると検出が可能である。それにより、タンチョウの住む環境の保全や維持を考えられるし、それが「此禽ワキテ多シ」(松前志1781)とされた道央や、更に道南への広がりを助けることになる。

かつて、この大きく優雅な鳥は全道に住み、人々に自然の安らぎをもたらす象徴でもあった。今、その状況が復活進行中である。それが完成した形を見せたとき、初めてタンチョウを本当の「北海道の鳥」と呼べることになる。

江差町 鷗島の野鳥の魅力

— 鷗島野鳥観察調査を通じて —

北海道環境生活部環境局生物多様性保全課主幹 坂 村 武

1. 鷗島（かもめじま）とは

ご紹介する鷗島は、北海道の南部檜山振興局管内江差町の市街地の海側突端にある半島状の島です（図1、2）。いつの頃からかは知りませんが、江差町で保存している江戸時代の絵巻などにはすでに鷗島として、記載されており、比較的最近まで本土とは離れた本当の島だったようです。名前にもあるように今でも年間を通じてカモメ類を見ることができ、当時からカモメと共存していたことが、地元民謡の『江差追分』で、～かもめの鳴く音にふと目を覚まし、あれが蝦夷地の山かいな～と歌われていることからわかります。

私が当地にいたのは、いわゆる転勤族で平成25年4月から平成28年3月までの3年間で、浜暮らしは初めてで貴重な体験でした。

島は、全体的に岩場がせり上がり、上部がほぼ平らとなっています。全体が江差道立自



図1. 江差町鷗島位置



図2. 鷗島

然公園のエリアで、南北に500m、幅は東西に200mと、丘側から見ると海に羽を広げたような形で、これもカモメをイメージさせると言われています。

本土側に面した岩場が南北に続き、その中ほどに島上部へ上がる階段道があり、その際にはイタヤカエデなどの広葉樹の林があります。上部に上がると公園になっていて、広い芝生や野外ステージ等の施設があります。また、一部クロマツの防風林があり、また島の北側に鷗島神社（分

社）があり、その周りに小さな広葉樹の林もあります。外海側に面した斜面には自然の海岸草原が広がり、南側は急な岩場、北側は平らな岩場が広がり、海水の浸る岩場は冬場のイワノリの採取場所となっています。狭い場所ながら複雑な環境が入り交じり、野鳥の貴重な休息場所や繁殖場所となっています。

2. 鷗島の野鳥観察の楽しみ方

島内では、カラ類、ホオジロ類、ヒワ類、ヒタキ類、ムシクイ類、キツツキ類、ツグミ類など林や草原にいる小型の渡り鳥も多く、海の鳥と山の鳥の両方が観察できるのがなんといってもセールスポイントです。海洋性のカモメ類、海ガモ類、アビ類、ウミスズメ類（ハシブトウミガラス）などとそのギャップがたまりません（写真1）。



写真1. ハシブトウミガラス（冬の嵐の日の江差港湾内で）

ビロードキンクロの次に見たのがアカゲラ、ミヤマホオジロの次に見たのがハシジロアビなどと、どこへ行ったの？と聞きたくなるような観察記録をできることが自慢できるところです。

また、色を楽しむのが野鳥観察の醍醐味の一つで、印象に残っているのが、赤色といえば、アカゲラ、イスカ、コマドリ（写真2）、ノゴマ、黄色といえば、カワラヒワ、キクイタダキ、ミヤマホオジロ、クロガモ、ハジロカイツブリ（夏羽）、青色といえば、コルリ、ルリビタキ、カワセミ、イソヒヨドリ、オレンジ色といえばジョウビタキ、アトリ、ミヤコドリ、紫色といえば、ハギマシコ、ヒメウ（夏羽）、迷彩色といえば、ヨタカ、アリスイなどです。

音を楽しむことでは、さえずりは姿が見えなくても、営巣を行うための縄張り宣言やメスを呼ぶためのラブコール



写真2. コマドリ (厳島神社裏の林で)

として聞かれます。鳥では渡りの途中なので、その練習として聞かれることが多いです。春の朝方は、センダイムシクイやエゾムシクイ、コルリが林の中で鳴いています。草原や芝生横の灌木の上でよく鳴いているのが、ホオジロ、ノゴマ、アオジです。こうした中でも私が鴟島で和むと考えるのは、島で繁殖するイソヒヨドリのさえずりでしょうか。ゆっくりと奏でられ、とてもよい気持ちになる、島でのゆったりした時間を青空と海の香りに囲まれながら楽しめる音色です。

3. 鴟島のカモメとは

一年を通じて見られるカモメ類はオオセグロカモメで、島内の一部岩場で数つがいが営巣しています(私のいたときは、幼鳥まで育った個体はいませんでした)。また、ウミネコが島のシンボルである瓶子岩や内湾側の漁業用生け簀上に営巣し、ヒナを育てています。ただし、観察の中で、ウミネコは1~2月頃鴟島から姿を消す時期があり、島を完全に根城としているのは、オオセグロカモメであり、私個人としては、鴟島の、ザ・カモメはオオセグロカモメと考えています。

一方、秋から春までの寒い時期のカモメ類は賑やかで、夏場の2種に加え、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメ、カモメ、ミツユビカモメ、そして数は少なかったのですが、ユリカモメがこれに交じりました。太平洋側の方が、餌が豊富でカモメの種類や数が多いと感じていました。そんな中ですが、特に天候の悪い風の強いときには、島の内湾側にたくさんのカモメ類が休息することがあり、欠航しているフェリーの横で波間に浮かぶ姿をよく見にきました。

ただ、未だにどうにも解せないのが、島にいるオオセグロカモメが留鳥として残っているのかどうかです。カモメ類の移動を見ていると、秋冬は南下、春は北上と動きが見られるので、鴟島で繁殖したオオセグロカモメも、おそらく冬は南下して本州の方へ移動するのかなと私は考えています。とにかく群れて、見かけによって個体識別ができないので、有象無象のカモメとしてしか見られないことが残

念です。誰かDNAの解析してくれないですかねえ。

4. 鴟島の主

カモメ、カラスに次いで、鴟島の頂点に立つ「主」として、よく観察できた種の一つがハヤブサです。私が転居した後、一時姿が消えたという話もあったのですが、昨年秋に、ハヤブサの夫婦の姿がありほっとしたところでした。鴟島はカラスにとってもよい繁殖環境で、狭い島の中に10個近く巣があり、ハヤブサは毎年カラスに子育てを邪魔されるので、なかなか子育てがうまくいかないのかもしれませんが。ハヤブサは、餌の渡り鳥が来ることを見込んで、鴟島を営巣地を選んでいたので、特に近くの開陽丸のマストの穂先は絶好の監視台となっていました。また、食卓としても大いに活用していて、開陽丸の甲板にはたくさんの鳥の羽が落ちていました。ハヤブサが変な動きをするときは、必ずターゲットがいて、そのハンティングの様子を見るのも観察の醍醐味でした(写真3)。

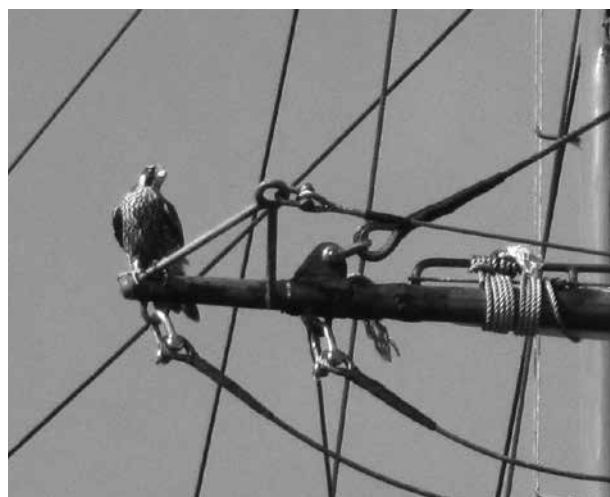


写真3. ハヤブサ (開陽丸マストで見張り)

その一つがミヤコドリで、一度だけ数日間鴟島に滞在し、外海側の岩場で、赤い嘴を海水の中に突っ込んで何か食べていましたが、ふと慌てて飛び立ったかと思うと、その後ろからハヤブサが追っかけてきて、追い回されて最後は沖の方へ逃げていきました(写真4)。

また、別の機会にはヤマセミが追いかけられて、山の谷間を素早くすいすい飛ぶ姿とは違い、逃げてても逃げてても追いつかれそうになり、時には海水に潜って難を逃れ、かわいそうになるぐらい肩で息する姿が、目に焼き付いています。

犠牲者を見たのは、カワセミで、やはり何度も海水に浸って逃げていましたが、最後は一撃で鋭い爪に引っかけられ、岩場に運ばれるやいなや、バツバツと赤や青の羽をむしられ、あっという間に内臓からどんどん食べられていました。

そんなハヤブサですが、気品があると思うのは、丸呑みにせず、少しずつ嘴で千切って肉片を食べるところで、ウミウやカモメの一気呑みをとても下品に思っていたからですね。



写真 4. ミヤコドリ (鷗島千畳敷の岩場で)

観察 2 年目には、3 羽の子を巣立たせ、開陽丸のマストに順番に上の方から、父親、母親、メス幼鳥 2 羽、オス幼鳥 1 羽でそれぞれ止まっていたのが印象的でした。その中で体の小さいオスと思われる個体が、巣立ち後にまだうまく飛べない中で、お姉さん 2 羽にチョされる姿が、人間と同じではほえましく感じましたが、実際は餌の奪い合いや縄張り争いの順位付けなどで、死ぬか生きるかの行為の準備だったのだと思います。鳥の主とはいえ、野生では甘いことを考えてはいけなかったところでした。

5. 鷗島上空の舞

鷗島は、島の上だけでなく、上空に結構、見所があるのも特徴です。夏から秋にかけて芝生やベンチに寝転がっていると、イワツバメ、ツバメ、アマツバメが虫を追ってか、ヒュンヒュンと音が聞こえるかのように、上空を飛び交います。

秋には、大群のミヤマガラス、コクマルガラス（こちらは少ない）が奥尻島方面へ向けて大集団で、島上空で上昇気流をつかみながら上昇し、やがて煙が流れるように沖へ向かって、飛んでいくのが見られます（毎年同じ場所ではないようです）。

春や秋には、渡り鳥が鷗島に寄らず上空を通過して行く姿も多いです。この場合は種類を同定することができず、ただ馬鹿みたいにあんぐり口を開けて空を眺めているだけの状態となり、観察しているようには見えません。

夕方に、ダイサギが集団で移動していく姿を見ることがありましたが、白い体が夕日に染まってトキ色となり、トキが飛んでいるかのような優雅な姿を楽しむことができます（これは偶然の産物なのでなかなか見ることはできません）。

6. 鷗島の冬の王者

「黒船来航」といえば、幕末の話ですが、鷗島にも、黒船のような巨体で冬場の灰色の空に悠然と現れるのが、オオワシです。オジロワシは、それよりも頻繁に江差の街上

空を飛んでいるのですが、黄土色のやや明るい色の上、カラスのモビングにもさらされ、トビほどではないにせよ、王者と呼ぶにはやや威厳に欠けるところがありました。

オオワシは、羽ばたきに力があり、遠くからでもその大きさに圧倒されます。道東では当たり前のように見られるところですが、鷗島ではごくたまに、単独でしか見られないところも、鷗島では冬の王者の称号を与えてよいのではないかと思います。

7. 鷗島を渡り鳥の聖地の一つに

日本海側には、舳倉島（石川県）、粟島（新潟県）、飛島（山形県）、松前大島・小島、天売・焼尻島（北海道）など、渡り鳥の聖地と呼ばれる洋上の小さな離島があることをご存じかと思います。これらは面積が小さく、休息する渡り鳥を見るのに最適な大きさで、また多くの渡り鳥が相当疲れて羽を休めていることから、警戒心も緩い時間滞在するので、バードウォッチャーにはあこがれの場所となっています。一般的には春と秋に、日本海ルートを北から結ぶとサハリン～礼文・利尻島～天売・焼尻島～雄冬岬（増毛）～積丹岬～茂津太岬～奥尻島～松前大島・小島～白神岬～竜飛岬という、洋上渡りルートが考えられますが、オオジシギのように千km以上をひとつ飛びという種もあるので、種によって休み方は様々かと思っています。

この中で、鷗島は、洋上とまではいきませんが、渡り鳥が移動しているときにどうしても休息を取りたくて、目につく場所となっているのではないかと推測されます。

私の調査時間は、長くても 4 時間くらいでしたが、早朝（平日）が昼間（休日）が観察の時間帯が多く、この時間以外にじっくり観察をしていれば、もっと面白いことがわかったのかもしれませんが。実際、鷗島にはハヤブサが繁殖していて、年中の根城として、中型の渡り鳥や小型カモ、ミツユビカモメなどを襲っていた以外に、観察記録にはないオオコノハズクなどの夜行性の野鳥の羽だけの遺骸を見つけることもありました。

一方、鷗島の離島と違う利点は街に近接し、宿泊場所や買い物には事欠かず、現在は北海道新幹線の乗り場まで 2 時間足らずで行くことができ、船の欠航の影響を受けない交通の利便性があります。

また、近隣には別の野鳥観察適地が何カ所もあり、少し車を走らせれば、季節にもよりますが、クマゲラ、エゾライチョウ、クマタカ、マガン、オオハクチョウ、ミコアイサ等に会え、渡りの時期にバードソンがあれば間違いなく、トップを狙える場所です。

また、朝日や夕日のきれいな場所で、夜には灯台の光が沖を照らし、奥尻へのフェリー乗り場もあり、船の汽笛や漁船の出入りなど港らしい音や光景もあり、情緒豊かな島です。

このようなことから、渡り鳥の聖地にふさわしい環境を備えており、是非見に行っていただければと思います。

函館鳥通信①

何食わぬ顔でイスカ何を食う

バードリサーチ 三 上 かつら

北海道野鳥愛護会の皆さま初めまして。NPO法人バードリサーチ研究員の三上かつらと申します。バードリサーチは、鳥の調査・研究やイベント開催などを中心に活動している団体です。私はバードリサーチではサンショウクイの情報収集を担当していますが、今季はツイッターを使ったカッコウ・ホトトギス調査も実施しました。これから何回か、私または北海道教育大学の三上修氏より、函館から楽しい記事を発信できればと思います。お付き合いのほど、よろしくおねがいいたします。

家族（北海道教育大学教授の三上修氏）の異動にともない、2014年の秋に道南に引っ越してきました。今の住まいを決めるとき、“赤松街道”がとても気に入りました。赤松街道は、函館市の一部から七飯町にかけて、国道5号線沿いに14.3kmにもわたりアカマツが植えられている並木道のことです。樹齢100年をこえたアカマツも多く、立派なものです。アカマツがなす景観は素敵ですが、そこにやってくるイスカもまた気になるところです。赤松街道でイスカをよく見かけるのは3～4月の間で、朝、ゴミ出しや除雪をしていると群れで飛びまわる鳴き声が聞こえてくるので「今日もいるな」とわかります。また、採食した木の下にまつぼっくりを大量に落としていくので、それも渡来の合図のひとつといえます。

イスカは、スズメ目アトリ科に属しており、カワラヒワやイカル、シメなどと同じ仲間の小鳥です。小鳥のなかではまあまあ大きいほうで、体重は40gを超えるものもあります。ちなみにシジュウカラは12～15g（福岡県での計測値）、スズメが24g程度です。体の色は、オスの成鳥では赤い色が多いのですが黄色いものもあります。写真を撮りたいときなど、つい体全体が鮮やかな赤いオスを目で追って撮影される方が多いのではないかと思います。オス成鳥のなかには、黄色い体羽がところどころまじっている個体や、オレンジっぽい個体、黄色い個体、まだら模様、なかにはシマノジコのごとく黄色とオレンジのツートンカラーの個体などを見かけることもあります。メスの成鳥は黄色、と図鑑等に記載されていることが多いのですが、黄色といえど全体的にも黄色いオスと比べて地味な色合いで、頭部は青みがかった灰色です。そして最も特徴的なのがその嘴です。かみ合わせが互い違いになっています。物事が食い違ってうまくかみ合わないことを「イスカのはしの食い違い」ということわざもありますが、私はバードウォッチャー以外でこの言葉を使っている現代人はあまり知りません。昔は東北地方などで飼育鳥として人気があったようですが、今は趣味嗜好のためには飼うことがで

きないので、イスカを間近で見たことのある人が減っているせいではないでしょうか。その互い違いになった嘴は、マツの種子をまつぼっくりから取り出して食べるのに特化した道具です。マヒワやヒガラが開けるのに苦労するような未熟で固く閉じたまつぼっくりでも、イスカは曲がった互い違いの嘴を使って難なく開けることができます。いい道具なのですが、機能が特化しすぎたためかマツやトウヒの種子を強く好んで食べます。

ところで、2018年の冬から春にかけての間はイスカが大変長かつ多く見られたように思います。1月を皮切りに断続的に群れをみかけましたが、群れサイズが時々変わっていたので、いくつかの群れが出入りしていたのかもしれませんが。最も大きな群れは60羽以上でした。それらが少し落ち着いてきたかな、という4月のある日、北海道教育大学の函館校キャンパス内をウロウロしていたところ、イスカの声が聞こえてきました。声のほうをたずねていくと、マツではなく、シラカンパの木に、雌雄おりませ8羽が群れていました。マツの種は食べつくされたのでしょうか、少し移動してもマツには行こうとしません。みな、なにかをついばんでいます。最初は葉っぱの付け根の水分でも摂取しているのかと思ったのですが、カメラで撮影したものを画像モニタで拡大して確認してみると、シラカンパの葉の裏についた小さい虫を食べているようです。マツの種子以外にもマツの芽をかじったりブナの芽などをついばんだりする様子はこれまでにみることがありましたが、虫を食べるところを自分の目でちゃんと確認でき



写真1. 広葉樹の葉の裏についたアブラムシを舐めるイスカ

たのは初めてでした。マツやトウヒの種子ばかり食べると思われがちですが、実は海外で解剖された例でも、イスカの胃から甲虫やアブラムシなどが見つかっていました。さらに動画を撮影しつつじっくり確認したところ、

時々舌を長く伸ばして葉っぱの裏についたアブラムシを舐めとっていることがわかりました（写真1、詳細は三上・三上2019および動画を“動物行動の映像データベース MOMO”<http://www.momo-p.com/showdetail.php?movieid=momo190611lc03a>参照）。イスカは嘴が特徴的なのでそこばかり見てしまいがちだったのですが、気づいてみれば当たり前のことで、アブラムシの時だけでなく、普段種子を食べるときでも、実は上手に舌を使って種子を口内にたぐりよせているのでした。ヒワの仲間たちもみな舌を上手に使います。イカルの古い名前を「まめまわし」といいますが、これは口の中で植物の種子を回すのがうまいことに

由来します。これも舌をつかって回しています。カワラヒワがヒマワリの種子を食べるときも、嘴で啜えたあと、口内でくるくると種子を方向転換させます。そういうヒワたちが何をしているかという、種子を舌で動かしながら嘴をパクパク動かして食（は）んで、種の皮むき、つまり“脱穀”をしているのです。今までわかったつもりでわかってなかったなあ、と理解の解像度が変わった瞬間でした。

引用文献

三上かつら・三上修 2019. 函館市で観察されたアブラムシを採食するイスカとその行動. Strix 35:95-100.

当会本拠地 野幌森林公園にヒグマ出没

探鳥幹事代表 早坂泰夫

2019年6月10日夜、野幌森林公園南側の道路を横断するヒグマが目撃されました。1941年以来、78年ぶりだそうです。野幌森林公園は大都市近郊にあって、2,053haと世界的にもまれな規模を持つ自然公園ですが、これまで地元の間では「ヒグマはいない」という認識が定着していました。当会でも安心してその自然の豊かさを堪能できる場所として、四季折々に探鳥会を実施してきました。

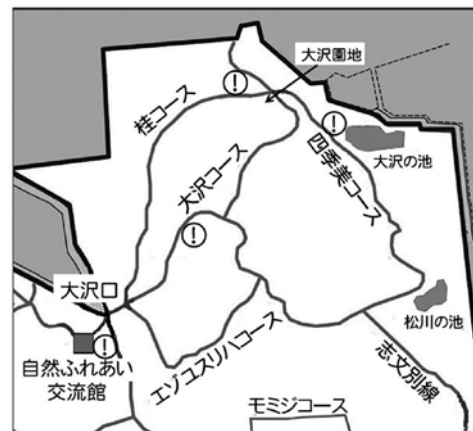
情報によると、翌11日の朝には、登満別口付近、志文別線などでフンが確認され、その後、公園外を含む北側地域で出没、そして7月1日には公園南端から約1kmの路上での目撃、2日以降の公園南側にあるハスカップ農園付近での目撃など、出没件数はあっという間に増えました。7月17日までの目撃情報は14件、自動撮影4件、フン、足跡などの痕跡情報は12件に及びました（北海道博物館のHPより）。

当会の探鳥コースになっている桂コース、四季美コース（大沢の池付近）、大沢コース、大沢口駐車場付近（右図参照）でも目撃やフンなどの情報が続く事態となり、6月30日、7月14日の2回の探鳥会を中止としました。

その後、7月17日を最後に公園内での目撃情報はいった

ん途絶えましたが、1か月以上経った8月24日に公園内の南側で目撃され、その後も複数回の目撃が続いていました。

9月5日、北広島市西の里地区に設置していた箱わなでヒグマが捕獲され、これまで出没していた同一の個体であると発表されました。とりあえず今回の事態は収束しましたが、今後も注視していく必要がありそうです。



① 6月、7月に姿またはフンが確認された場所

表紙の鳥

ギンザンマシコ



何年か前から、6月末あるいは7月初めに旭岳を訪れ、ギンザンマシコに会うことが初夏の恒例となっています。今年も7月初めの週末に出かけました。そして、ロープウェイ姿見駅からほど近い展望台で、観察機材と撮影機材をセットしてこの鳥の出現を待ちました。待つことしばし・・・耳になじんだ懐かしい鳴き声がした方を探しましたら、いました！いました！ハイマツにとまって鳴いています。色鮮やかな雄です。今回は、その後もしばしば出現して我々を大いに楽しませてくれました。この時のギンザンマシコを詠みました。

ハイマツに 霧は流れて
やはらかき やさしき調べ ギンザンマシコ

白田 正（札幌市中央区）

画像によるタンチョウ個体の同定

タンチョウリサーチ 代表 正 富 欣 之

個人を識別するのに、皆さんは相手のどこを見ますか。普通は顔ですね。鳥ではハクチョウ類の嘴の黒模様やフクロウ類の斑紋など、翼をたたんでいる時でも体の特徴で識別できる場合もあります。しかし、一般に小鳥は名札が付いていないと難しく、この点大型のタンチョウ *Grus japonensis* も同じです。ただ、小鳥などでは、発信機能が無ければ標識装着後に再捕獲しないと、生存や移動が確認できませんが、タンチョウは、再捕獲せずに望遠鏡などで標識番号を読むことでそれが可能です。いまのところ、北海道のタンチョウで標識付き（標識個体）は、全体の約1割です。そのため、個体識別できる場面は、ごく少ないのです。将来的に、鳥の顔（外観）認証システムが開発されれば、標識付けが必要なくなるかもしれませんが・・・。

北海道のタンチョウは主に道東に生息していますが、近年は個体数が増加したことにより、道北や道央圏でも観察されることが多くなってきました。しかし、標識個体の割合が低いと、個体識別などは難しい状況です。「羽数が一緒」、「年齢が同じ」、「近くで別の目撃例がある」といった理由だけで、「同一個体」と断定するのは正確性や客観性を欠いた「思い込み」ということになりかねません。もちろん、同一個体の可能性はあるのですから、客観的に判断できる理由や材料を挙げるのが望ましいと思います。

私も一研究者として、このような「思い込み」に陥らないように留意することを心がけています。

本稿では、標識が付いていないタンチョウで、ほぼ同一個体と同定された事例を紹介します。写真1は苫小牧市で、写真2は小樽市でそれぞれ異なる日に別人が撮影した2羽（便宜的に個体A、Bとしています）です。撮影場所は、直線距離で60km以上離れています。両写真の2羽とも頸に茶色の羽毛が残り、初列風切りの先端が黒いことなどから、昨年生まれの若い個体とわかりました。さらに、翼の次列風切り羽の特徴（写真の円内）も2羽とも一致していました。掲載した写真は2枚ずつですが、実際は複数枚の写真から両翼の風切り羽や雨覆い羽の黒斑等についても比較・確認しました。したがって、羽数、年齢構成および身体的特徴の一致、また移動能力を考慮した場合の確認地点間の距離に矛盾がないこと等から、総合的にみて同一個体の可能性が極めて高いと判断できます。

また、ネイチャー研究会inむかわで収集している画像を基に、同様の比較・確認を行い、個体Aはむかわ町で生まれ育ったタンチョウの可能性が高いことも判っています。こうした若鳥の時の特徴がいつまで残るかは、残念ながらはっきりしていません。このような画像による個体識別の具体例として、北海道野鳥だより第194号の表紙写真（2018年4月17日10時過ぎ野幌森林公園、田中冬彦氏撮影）でも確認を行ってみました。私が2018年4月13日に江

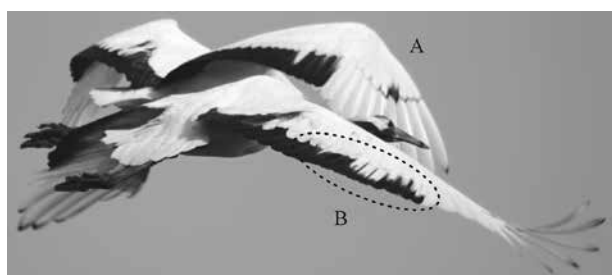
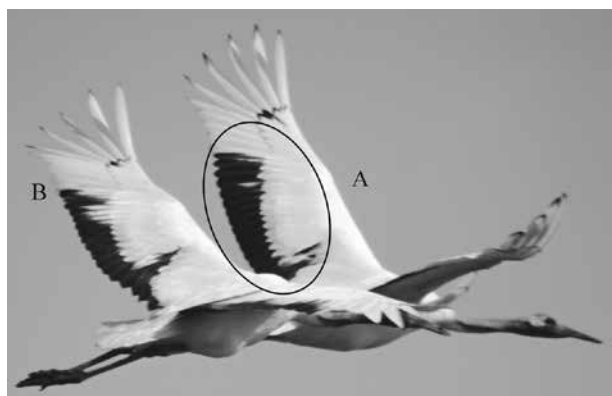


写真1. 苫小牧市 2019年3月19日 著者撮影
上: 円は個体Aの左翼 下: 円は個体Bの右翼

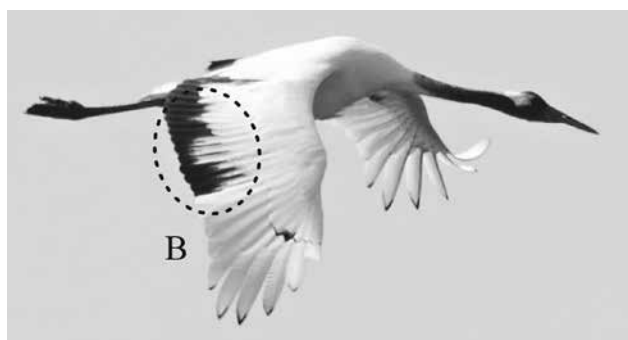
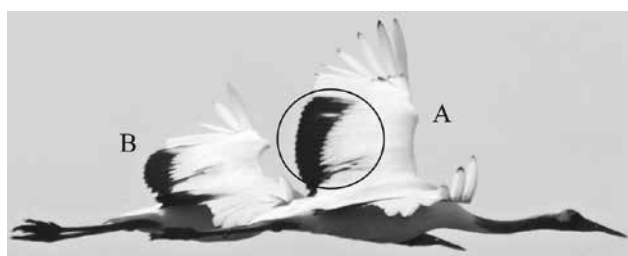


写真2. 小樽市 2019年4月9日 片倉晴雄氏撮影
上: 円は個体Aの左翼 下: 円は個体Bの右翼

別市の石狩川河川敷で撮影した複数枚の標識番号318の個体画像と比較すると、「似ている」個体だと言えます。が、やはり一枚の画像だけだと、「同定」するための情報量としては少なく感じます。

今回の場合、両翼の特徴が不明であれば、「ほぼ同一個体」とまでは言えなかったでしょう。つまり、身体的特徴を捉えることができる画像が記録されていたことが、標識なしの個体にもかかわらず確実性の高い同定を可能にしました。同じような状態・形状の写真がたまたま撮影されていたとしても言えますが、個体の動きに合わせて複数枚の写真を撮影しておく、タンチョウに限ったことではありませんが、身体的特徴を捉えられる確率が高くなります。こうした確実性の高い記録が集められることにより、それを基にした対策が練られ、鳥類の保全につながる事が期待されます。

全体の個体数だけから考えると、北海道のタンチョウは絶滅の危険性が低いといえます。しかし、道東に集中して生息しているため、感染症等による個体数減少リスクを依然として抱えています。そのリスクを低減させるために生息地を分散させる取り組みが行われています。そのため、今後も道東以外へのタンチョウ出現が多くなると予想され

ます。その際に同一個体であることが確認されれば、移動状況や定着性など、様々なことが明らかになります。しかし、前述のように標識個体割合が低い、観察された個体が標識から同じであると判断できる機会は、それほど多くないでしょう。したがって、標識が付いていない個体の同定は、タンチョウの保全上、とても重要なことになると考えています。

そこで、読者の皆さんにタンチョウに関する情報提供のお願いです。道東以外で、タンチョウを目撃した際には、タンチョウリサーチの私までご連絡いただければ幸いです(連絡先 E-mail:tancho_research@xmail.plala.or.jp)。

写真撮影が可能な場合には、動きに合わせて複数画像を記録していただければと思います。具体的には、一方向からの「立ち姿」だけではなく、前後左右を向いたもの、飛翔や開翼している場面などです。なお、周囲の安全と個体への影響に配慮して、無理のない範囲で撮影してください。ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、撮影状況および画像を快く提供してくださった片倉晴雄氏ならびにネイチャー研究会inむかわに深謝の意を表します。

野鳥 情報コーナー

積丹町神威岬でクロジョウビタキ

札幌市豊平区 小谷 浩一

2019年4月13日、快晴の日に私は神威岬に野鳥観察に出かけました。到着して間もなく、ホオジロ、ミヤマホオジロが地面で餌取りをしており、春を感じました。

北海道ではあまりみられないジョウビタキも雄雌共に遠くに見え、近くに来てくれないかと思っていたところ、地面からひょっこり小枝に乗った鳥が視界に入りました。顔から胸までが黒くお腹がオレンジ色をしているのが見え、胸とお腹の色の境目がジョウビタキと違うように見えたので見たことのない鳥かもとレンズを向けるとジョウビタキであればグレーである頭も黒く、やはりジョウビタキじゃない？と思い、シャッターを切りながらその鳥が何なのかを考えワクワクしていました。

それからその鳥はちょろちょろ見え隠れしていたので、近くに止まってくれないかと息を潜めて待ちました。15分ぐらい待っていると、その鳥は近くに止まってくれたので、中々じっとはしてくれませんでした。ファインダーで懸命に追いかけ、なんとか綺麗に撮影することができました。



クロジョウビタキ雄 2019.4.13 後志管内積丹町神威岬

絶対珍鳥だと思い、はやる気持ちを抑えられず現場でネット検索をしたところクロジョウビタキがヒットしました。クロジョウビタキと分かった時は言葉に表せないくらい感激しました。

もう会えないかとも思い、つい次の日も2時間かけて会いに行ってみました。残念ながら会えませんでした。珍鳥発見の嬉しさはありますが、この綺麗な色合いとクリクリした可愛い目の持ち主に滅多に会えないと思うと、ちょっと複雑な思いです。毎年会えるようになると珍鳥ではなくなりますが、それでもこの可愛い鳥を毎年見られるようになる事を願うばかりです。



今年はじめて会えたオオルリ
藤の沢
2019. 5. 5
札幌市南区 陣内 直子
(じんのうちなおこ)

わたしは藤の沢小学校5年で、5月5日、藤の沢の探鳥会にさん加しました。晴れていて、とてもあつかったです。26度くらいにもなりました。さくらもまんかいで、木の緑もとてもきれいな日でした。

白鳥園で集合でしたが、そこはわたしが3、4年生の時に、冬、鳥のかんさつに行ったところでした。でも雪がなかったので、ぜんぜんちがう感じがしました。そこから森に入った道も、近くに住んでいるのに知らないところでした。森に入っすぐに、六が池や愛鳥広場があつてびっくりしました。藤の沢小学校で毎年5月に「愛鳥祭」というのがあつて、その時に通る道だったからです。

そこで、とてもきれいなウグイスの声が聞こえました。少し行った谷のところで、オオルリに今年はじめて出会えました。とてもきれいな鳴き声はずっときこえていたから、その声の本当の鳥に会えてとてもうれしかったし、青がとてもきれいでした。

小鳥の村から出るときには、キビタキにも会えてうれしかったです。白鳥園に帰るとちゅうの川のところで、もう一度、近くでオオルリを見ることができました。川におりて水を飲んでいるようでした。小鳥の村で見たより、もっと青がこい色できれいでした。

たくさん鳥に出会えたし、知らない道にも行けて、とてもたのしい探鳥会でした。



探鳥会参加の子供たち

【記録された鳥】 マガモ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、ツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、マヒワ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ 以上30種

【参加者】 秋本秀人、秋山洋子、安保信雄、岩井幸子、上

坂 久・千幸、大表順子、小堀煌治、小林弘輝、國本昌秀、近藤章子、小谷内久江、佐藤香織、佐藤珠江、品川陸生、陣内麻友美・なおこ・ともこ・ゆうこ、田中さちよ、辻 雅司・方子、道場 優、中島 蘭、中村ケイ子、蓮井肇、早坂泰夫、樋口孝城、三島千恵子、本杉政司・朋子、森岡俊英、森本玲子、門馬公生 以上34名

【担当幹事】 小堀煌治、品川陸生

野幌森林公園

2019. 5. 6

【記録された鳥】 オシドリ、ヨシガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、ツツドリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ 以上30種

【参加者】 安保信雄、石田利勝、板谷輝美、今村三枝子、植田亜紀子、大表順子、小原正徳、栗林香苗、後藤広江、小西峰夫・美美枝、小島俊幸、小島惇子、佐藤隆男・充江、志賀裕悦、高橋貞夫、竹田芳範、田中さちよ、辻 雅司・方子、長野隆行、中村 隆、中村尚彦、畑 正輔、早坂泰夫、藤田 潔、辺見敦子、前田八郎、松原寛直・敏子、丸島道子、三輪節子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸 以上37名

【担当幹事】 畑 正輔、横山加奈子

千 歳 川

2019. 5. 12

札幌市東区 佐藤 ゆう紀

新緑萌える季節。野原に降り立ったハクセキレイ。群生するエゾエンゴサク。遠くからはカッコウの鳴き声が耳に届く。私の原風景は野幌の原生林の中にある。

5月12日千歳川にて初めての探鳥会。小学生の娘、会員である母と共に参加した。この日、千歳の最高気温は16℃、最低気温は3℃。天候は晴れ。風はとても冷たく肌寒く感じた。午前7時半頃、集合場所の広場では、早くも双眼鏡を構えた人々がめいめい観察を始めていた。皆、口々に「あれは何々」と野鳥の名前を教えてくださいましたが、全くの素人である私は、飛び立つ鳥を目で追うのがやっとだった。

午前8時頃いよいよ出発。ときおり強く吹く風に身を縮こまらせながら、第四ダムを目指して川沿いを歩き始めた。はじめは、思うように野鳥を観察できなかったが、途中、エゾエンゴサク、エンレイソウ、スマレなどが目を楽しませてくれた。1時間ほど歩き、日がやや高くなってきた頃、川を泳ぐつがいのマガモ、樹の上部にとまるウグイスを捉えることができた。聞けば、実際にウグイスが鳴く

姿を目にすることはあまりないそう。貴重な体験だった。

午前10時半頃、第四ダムに到着しダムの上で休憩をとった。川の両岸では萌え出ずる若葉に混じって遅咲きの桜が咲き、川面には花筏が浮かんでいた。春も終わりを告げ、まもなく千歳川にも初夏が訪れるのであろう。休憩後にセグロセキレイを目にすることができた。幼少期に見たハクセキレイの仲間だ。

帰路では、ヤマガラ、キビタキを観察した。気温が上昇し動きが活発になってきたためか、鳥のさえずりを多く耳にした。観察した野鳥の数はそれほど多くはなかったが、様々な美しい風景を目にすることができた。

原生林から離れて暮らす今でも、ときおりハクセキレイの愛らしい姿に心躍らせた日を思い出す。今回の観察会では、幼き日の思い出深い風景に新たな記憶を加えることができ、心満たす時間を過ごした。

【記録された鳥】ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、トビ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、クキイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、コムクドリ、クロツグミ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、アオジ、クロジ 以上40種

【参加者】安保信雄、板谷輝美、伊藤敏正、今村三枝子、岩井 茂、岩井幸子、江坂嘉昭、大表順子、川村宣子、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、小島俊幸、小谷内久江、近藤章子、佐藤香織、佐藤ゆう紀・美梨、品川陸生、島崎康広、高島 均・明美、高橋宣子、田中さちよ、鳥屋祐樹、長尾保秀・由美子、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、美頭佳範、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山本育子、吉田慶子 以上37名

【担当幹事】栗林宏三、島崎康広

礼文島宿泊探鳥会

2019. 5. 17～19

札幌市白石区 田中 克憲

本年2月に入会しました田中克憲と申します。昨年8月に道東を旅行した際にエゾリスとアカゲラをスマートフォンで撮影したのがきっかけで、野鳥撮影を始めました。

さて、5月17日～19日の礼文島宿泊探鳥会に妻と参加しました。入会後、初めての探鳥会参加です。札幌駅から、バスとフェリーで約400kmの移動。途中の休憩、フェリー乗船中も「鳥がいれば逃さない」皆様の熱心さに脱帽でした。

礼文島に到着し、早速富川さん確保(?)のミヤコドリを撮影できました。野幌森林公園しか知らない私には「あんな鳥がいるのか!」と驚きでした。礼文町の町鳥「コマドリ」も観れるのではないかと期待が持てるスタートで

した。

ところがどっこい、2、3日目と強風下(礼文島のそよ風?)の探鳥会となりました。その中でも、鳥たちの声を捉えて「あ、コマドリが鳴いてる!」「ミソサザイの声!」と鳥を判別されるベテランの皆様の側で、勉強させて頂きました。少なくともコマドリとミソサザイの鳴き声は覚えしました。

野鳥だけでなく「コバルトブルーの海はこれか!」と絶景に感動し、「桃岩」「猫岩」の形に感心したりと、礼文島の自然も楽しめました。

コマドリは2日連続の4時過ぎ起きも、藪から藪に移る影を観るにとどまりました。2m後ろを歩いていた妻はラッキーでした。「もう少し時間があつたらなあ」と、コマドリの鳴き声に後ろ髪をひかれる思いで、礼文島を後にした次第です。

幹事の皆様には大変お世話になりました。また、何も知らない私どもに親切にしてくださいました参加者皆様に感謝です。機会がありましたらまた是非参加したいと思います。



富川さん確保(?)のミヤコドリ 撮影 筆者

【記録された鳥】

(5.17) 稚内港、礼文島航路、香深港周辺

シノリガモ、ヒメウ、ウミウ、ミヤコドリ、キアシシギ、アカエリヒレアシシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ウトウ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ 以上16種

(5.18) 香深港周辺、緑が丘キャンプ場、久種湖畔、澄海岬、スコトン岬、金田ノ岬、北のカナリアパークほか

ヒシクイ、マガモ、コガモ、キジバト、アオバト、カワウ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、オグロシギ、ホウロクシギ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、トウネン、ヒバリシギ、エリマキシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、チュウビ、ハイタカ、ノスリ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、ムクドリ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、オオジュリン、カワラバト 以上48種

(5.19) 桃岩周辺、香深港、礼文島航路、稚内港
ハシボソミズナギドリ、ウミウ、ツツドリ、アカエリヒレ
アシシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ウトウ、トビ、
ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒガラ、シジュウカ
ラ、ウグイス、エナガ、センダイムシクイ、ミソサザイ、
アカハラ、コマドリ、ノゴマ、スズメ、キセキレイ、ハク
セキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ウソ、アオジ、クロ
ジ
以上27種



礼文島 北のカナリアパークにて

【参加者】 今村三枝子、大表順子、岡部良雄・三冬、小野
寺まゆみ、栗林宏三、近藤章子、佐々木 裕、品川睦生、
白澤昌彦、高橋良直、高橋きよ子、高橋宣子、田中克憲・
文子、辻 雅司、道場 優、富川 徹、中村 隆、畑 正
輔、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城、平岡信夫、
藤吉 功、辺見敦子、松原寛直・敏子、丸島道子、村田恵
一、村田睦子、本杉政司・朋子、山本昌子、横山加奈子、
吉田慶子
以上37名

【担当幹事】 栗林宏三、佐々木裕、畑 正輔、早坂泰夫、
横山加奈子

鶴 川 河 口

2019. 5. 26

【記録された鳥】 カルガモ、クロガモ、カイツブリ、ウミ
ウ、アオサギ、カッコウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、
トビ、チュウヒ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シ
ジュウカラ、ヒバリ、ウグイス、オオヨシキリ、コヨシキ
リ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオ
アカ、アオジ、オオジュリン
以上24種

【参加者】 阿部勝利、池田美由紀、板谷輝美、岩井 茂、
岩井幸子、白田 正、大表順子、小山内恵子、門村徳男、
川端 純、岸野一法、北山政人、佐藤香織、品川睦生、鈴
木幸弥・順子、高島 均・明美、館山 睿・未央・太雪、
田中さちよ、田守真一・敦子、中村英一、畑 正輔、早坂
泰夫、樋口孝城、美頭佳範、本杉政司・朋子、山下 茂、
吉田鏡子、鷺田善幸
以上34名

【担当幹事】 白田 正、門村徳男

野 幌 森 林 公 園 (早朝)

2019. 6. 2

江別市 平田 修二

1984年に引っ越してきた我が家の隣は大麻中央公園で、
聳え立つカラマツ林、多種類の広葉樹の大木（名前を知る
のが大変だった）、大きなコイがいて渡り鳥がやってくる沼
がある素晴らしい環境でした。早速餌台を作りやってくる
小鳥たちを少しずつ覚ええました。パンの耳、くず米、ヒマ
ワリの種、脂身と餌の種類を増やしていくと、来る野鳥の
種類も増え、必死に図鑑と野鳥の鳴き声テープ（今はネッ
トがあって便利！）で少しずつ名前を憶えていきました。
常連のカラ、キツツキからシメ、アトリ、時にはレンジャ
ク、コウライキジも来ます。鳥ではないが、リス、キツネ、
ネズミも常連です。小学生になった子供たちは、自由研究
に「我が家に来る鳥たち」という絵本を作っていました。

やがて、早朝に囀る鳥に気づくようになり、カラマツの
てっぺんにいる姿を偶然見て、必死に図鑑、ネットと照合
し、クロツグミと知り、同じようにキビタキを知りまし
た。それからは我が家のこの二大美声を聴くために、4月
以降は2階の寝室の窓を開けて寝ています。目覚めるとク
ロツグミの囀り。

でも、大麻中央公園で囀る知らない野鳥がまだ多い！
日の出に合わせて、近くにある石狩川、厚別川にも行くこ
とがありますが、囀る鳥の種類が異なりまったくわからない！
とても悔しい！

そんな時、昨年春の早朝、森林公園をサイクリングして
大沢口まで戻ったところで、「北海道野鳥愛護会」の旗にた
むろする人たち見て声を掛けました。そこで探鳥会に誘って
いただき、これまで数回参加しています。友人とも行きた
し、4月には東京から来ていた（小学生のころ自由研
究をした）娘と孫（5歳）も参加させていただきました。

と、長々と書いてきたとおり、ボクは出会った鳥たちの
名前が分からず、とても歯がゆい歳月を送ってきたので
す。貴会の探鳥会では、皆さん、いかにも野鳥が好きなか
らでなく、質問すると何でも丁寧な答えてくださるので、
歯がゆい歳月を送ってきたボクにはとてもありがたく快適
です。

今回（6月2日）の早朝探鳥会は、久しぶりの慈雨の翌
日の快晴、野鳥の囀りだけでなく、木々の緑、透き通った
空気、やわらかい陽射し、実に爽快でした。森林公園の近
くに住むボクには、早朝探鳥会はとてありがたい企画
で、年2回はやってほしいなあと期待しています。

【記録された鳥】 マガモ、カイツブリ、キジバト、アオバ
ト、アオサギ、バン、ツツドリ、トビ、フクロウ、コゲ
ラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラ
ス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒ
ヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、オオムシクイ、センダイム
シクイ、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、コサメビタ
キ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、イカル、アオジ
以上32種

【参加者】阿部真美、大表順子、蔵谷徳洋、小西美美枝、近藤章子、品川睦生、田中 陽・雅子、田中さちよ、田守真一・敦子、高橋利道、椿 典子、富川 徹、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、本間卓也・裕美、藤森行雄・祐子、平田修二、森岡俊英、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、横山加奈子 以上28名

【担当幹事】富川 徹 早坂泰夫

厚 別 川

2019. 6. 9

札幌市中央区 伊藤 晴美

私は新聞にのっていたノビタキの姿がとてかわいいで、それにつられて参加しました。少し肌寒い曇り空のスタートでしたが、日影の無い道を歩くのにはちょうど良かったです。川沿いの道を歩き始めてすぐに、カッコウ・ノビタキ・オオヨシキリ・エゾセンニュウとにぎやかな声が聞こえてきました。右に左にみんなで鳥を探し「あんなか飛んだ。」「今のは何?」「あそこにいる!」など鳥達に負けないくらいにぎやかに、楽しい時間をすごしました。

お目当てのノビタキは子育て中で幼鳥も見ることができ、ほのほのしました。また、カッコウはなかなか見つけづらいのですが、今回は見やすい所に何度も止まってくれたし、オオヨシキリは口の中の赤がはっきり見えるように、ギョギョシとないているのが見られて本当に楽しい時間でした。

そして愛護会の世話人のみなさんが、参加者の声にすばやく反応してすぐに望遠鏡に入れてくれるので、良く見ることが出来たし、飛んでる鳥や鳥の声で名前を覚えてもらえたのも、勉強になりました。飛んでる鳥を双眼鏡で見ることが私はうまく出来ないのですが、これは練習すると出来るようになるのとことなのではと思います。

あと、この時期木々の多い公園などは、日影がありすずしいのですが、葉がじゃまして鳥がとて見づらいのが難点です。でも、背の高い木が少なく、開けていて草原が見わたせるこんな場所はとて良い所だと思います。

今回、オオジュリンもいるらしいと聞きました。ぜひ見たいと思い、オオジュリンを探しにまた来たいと思いました。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、ウミウ、アオサギ、カッコウ、トビ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ

以上22種

【参加者】秋山洋子、阿部勝利、安保信雄、石井正訓、伊藤晴美、伊藤勇一、井村茂和・泰子、遠藤友二・ノリ子、大表順子、太田 潤・恒美、小嶋俊幸、小本晴香、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・美美枝、近藤章子、齊藤けい・瞳・蓮・あおい、佐々木 賢、品川 睦生、高島 均・明美、田中さちよ、辻 雅司、道場 優、永野一彦・朋美、成田裕幸・しずか、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、平田修二、松原寛直・敏子、宮地雄一郎・茜里、本杉

政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子、若山幹夫 以上48名
【担当幹事】品川睦生、横山加奈子

福 移

2019. 6. 23

横浜市 三輪 節子

バードウォッチングを始めて2年足らずの初心者です。札幌では、娘が北区在住なので主に北大の北部分・恵迪の森や遺跡庭園で野鳥を観察しています。新しい知見も多く満足なのですが、残念なのは鳴き声を聞いても何鳥が判別できないことです。植物のことも教えていただけたらと探鳥会に参加しました。今回3回目です。

心配された天気も徐々に回復し、コムクドリが飛び交う福移小中学校から石狩川の堤防に上り、墓地周辺そして川辺りを廻りました。コヨシキリ・ノビタキ等草原性の鳥を中心に多種多様な野鳥を観察することができました。

一番印象に残ったのはノゴマです。眉斑と顎線の白さに対し喉の赤色が際立っていました。さえずりも快活です。次には雌も見たいものです。

堤防上で見たオオジシギの飛翔にもびっくりです。ディスプレイで有名ですが、タシギやヤマシギの連想から地上での姿をイメージしていました。

河畔林の高みに止っていたカッコウも北海道に来て初めて見た鳥です。静止する姿をスコープでじっくり観察できました。

横浜では冬鳥のオオジュリンやアリスイ・ベニマシコ・アオジなど、なぜか懐かしい感じです。夏冬異色のものは夏羽の方が鮮やかで目立つように思います。

エゾセンニュウやシマセンニュウの姿は確認できませんでしたが、鳴き声を聞き、区別を教えてくださいました。

水鳥は少なかったものの多くの野鳥を楽しむことができました。生態の説明や質問への対応、スコープの調整等いろいろお世話になり、本当にありがとうございました。今年もできるだけ探鳥会に参加したいと思います。

【記録された鳥】ヒドリガモ、マガモ、キジバト、ウミウ、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、オオジシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、チュウビ、アリスイ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ウグイス、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、コムクドリ、ノゴマ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン

以上34種

【参加者】秋山洋子、板谷輝美、臼田 正、岸野一法、北山政人、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、佐々木賢、品川睦生、高橋きよ子、高橋貞夫、立田節子、辻 雅司、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、三輪節子、横山加奈子 以上19名

【担当幹事】辻雅司、原 美保

※6月16日の植苗ウトナイは雨のため、6月30日と7月14日の野幌森林公園はヒグマ出没のため中止になりました。



【宮島沼】2019年9月29日(日)

宮島沼はマガンの秋の渡りの中継地として重要な場所です。例年この時期に渡来ピークを迎えます。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類などが見られます。時には猛禽類が上空にあらわれ、水面の水鳥たちが一斉に飛び立つ場面なども見られます。午前11時半頃に鳥合わせ、解散となります。天気良ければ、駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：湖畔 10:00

交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発 (月形行)

または月形駅発 (岩見沢行)

「大富」下車 徒歩20分

【野幌森林公園】

2019年10月6日(日)、11月3日(日)、12月1日(日)

紅葉の秋から冬へ向かう野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去りカラ類やキツキ類などが主体ですが、ツグミやマヒワ、レンジャク類などの冬鳥が見られることもあります。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。12月からは冬コースに変わり、12時頃大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。昼食は自然ふれあい交流館でとることができます。

※公園内でヒグマの出没情報があった時には、探鳥会は中止の場合もあります。ホームページなどで連絡いたします。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌駅発 (文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩5分

夕鉄バス 新札幌駅発 (文京台南町行)

「大沢公園入口」下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2019年11月10日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に渡ったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、カモ類が見られます。渡り途中のマガンやヒシクイなども見られます。これら水鳥類の観察を主体に湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。12時頃にネイチャーセンター内で鳥合わせして解散となります。同じ場所で昼食をとることができます。

集 合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発 (苫小牧発)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

10:00~16:00 (土日、祝祭日を除く)

★室蘭唐松平探鳥会のお知らせ★

日 時：2019年10月20日(日)

集 合：唐松平 (下図参照) 9:30

交 通：公共の交通機関はありません。

JR室蘭駅からタクシー利用可能。

室蘭測量山直下の唐松平で、おもにハイタカ、オオタカ、ノスリ等のタカ類の渡りを楽しみます。タカ類の観察は晴天が必須条件ですが、ここではタカ類以外の鳥たちも観察することができます。11:30頃の鳥合わせの後は自由解散としますが、引き続き探鳥を楽しむことも可能です。

道央自動車道利用の場合、室蘭インターで降り、白鳥大橋を渡り、山頂にTV局アンテナが多数設置された測量山を目指します。随所に測量山への交通標識があります。道幅が狭くなった山頂間近の交通標識を右折 (至測量山) せずに直進、約100mで唐松平です。



鳥 民 だ よ り

◆野鳥カレンダーの販売◆

「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダーを販売します (1部1,200円)。お渡しは11月ウトナイ湖探鳥会と12月野幌森林公園探鳥会となりますので、申込時に受け取り場所をお知らせください。

申し込み先 畑 正輔 TEL 011-894-0017

携帯TEL 090-3117-4261

E-mail hata2002@lapis.plala.or.jp

【新しく会員になられた方々】

野中 政博 (札幌市西区)

高浪 一史 (札幌市白石区)

永野 一彦・朋美 (札幌市豊平区)

春日 和子 (札幌市東区)

本谷 英一 (江別市)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円 (会計年度 4 月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 11 丁目加森ビル 5・6 階 北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251-5465

HP のアドレス <https://aigokai.org>